

二〇一四年六月二六日（鉢塚古墳ほか参加者一六名）

峰雲を持ち上げてをる飛簷かな うつぎ
 浮草にかがめば水の匂ひけり "
 炎天に迷ひし路地は行き止まり "
 鐘楼に坐し殺生の蚊を打ちぬ "
 梅雨晴間まってきましたとゆくところ よし子
 日傘相かたむけ会釈交しけり "
 五月間古墳は巨石鎧ひけり "
 似合はなくてもあればよし夏帽子 "
 権現の磴の百段炎天へ 小袖
 迷ひ道して斑猫と出会ひけり "
 神木の天蓋なせる五月間 "
 立て板を流るるごとし作り滝 "
 鐘楼を借りて推考風涼し ぼんこ
 蘭亭を模す四阿や菖蒲園 "
 とんぼうの仏足石を好みけり "
 大池を統べて噴水高きかな ひかり
 日に倦みて疲れの見えし花菖蒲 "
 風通ふ菖蒲田の亭去り難し "

玄室に響くガイドの声涼し 有香
 揚羽蝶寺領を案内することし "
 セコイヤの銚をのみこむ雲の峰 "
 梅雨晴間仏足石の指に水 宏虎
 紫の唇のゆるみし花菖蒲 "
 地藏さま足踏んまへし洞涼し せいじ
 玄室の天井なせる岩涼し "
 権現の急磴仰ぐ梅雨の晴 わかば
 花菖蒲愛づる畦道水匂ふ "
 万緑に薨重ねて勅願寺 菜々
 羨道の一步に汗の引きにけり "
 高揚がる噴水雲に触れむとす はく子
 四阿へ菖蒲の花の風通ふ "
 四阿を要に四囲の花菖蒲 満天
 風涼しみどりの百撰てふ園に "
 噴水の穂と白雲の出会いかな "

吟行句会みの選

二〇一四年六月二六日（鉢塚古墳ほか参加者一六名）